

【論文】

プリンス・エドワード島の「可能世界」 —地誌としての『赤毛のアン』—

水野 勲

I はじめに

筆者の専門は数理地理学であるが、他方では、大学の「地誌学」の授業を合わせて15年ほど講義し、研究と教育で特に内的な交流をもたずに過ごしていた。しかし、地誌書の断片を授業で読むうち、地誌の理論的な課題に関心をもつようになった。それは、文学理論を参照しつつ、地誌chorologyの概念を広げられないか、というものであった。本稿の目的は、日本で多数（主に女性）の読者をもつモンゴメリの小説『赤毛のアン』を取り上げ、これを地誌とみなし、カナダ南東岸プリンス・エドワード島の「可能世界」¹⁾を読むことである。

作家は小説の中で登場人物たちに舞台chôraを用意し、それぞれの役割を割り振る。その際、実在の土地を思い浮かべながら、物語で重要な場所toposを詳細に記述する。それは、細部が具体的に書かれた地形誌topographyでもあろう。一般に地誌は、その土地がどのような場所であるかという、事実を記述したものと考えられている。しかし、地誌が必要とされるのは、その土地の人々と同じように物を見て考え、そこに暮らしたかのような内的経験を得られるからではなからうか。文学が、世界を生きいきと理解するモデルであるなら（大江 1988: 90-103）、地誌は文学理論から学べるのではなからうか。

「地理的想像力」を論じたGregory (1994) は、サン=テグジュペリ『人間の土地』の引用から論を始めている。「それにしても、あの晩、なんと不思議きわまる地理学の講習を、ぼくが受けたことか！ ギョメはぼくに、スペインを教えてはくれなかった、彼はスペインをぼくの友達にしてくれた」（サン=テグジュペリ 1955: 15）。ここから筆者は、「地誌学」の最初の授業で、「彼はスペインをぼくの友達にしてくれた」という一節を、「地理学第1法則」と呼ぶことにしている。それは、地誌というとき、世界の地理学の革新期であった1970年代に、Tobler (1970)が「地理学第1法則」を唱え、他方ではTuan(1974)がトポフィリア（場所愛）を唱え、この二つをどう結びつけるかが、重要であると思われたからである。

Toblerは実証主義地理学の中で理論的な考察をし、地

図変換や空間的拡散などの洞察あふれるモデルを発表してきた。筆者が注目するTobler (1970) の論文は、今日のコンピュータ・シミュレーションとGISの最も早期の範例ともいえる。しかし、この論文を有名にした「地理学第1法則」の主張は、筆者にはあまり納得のいかないものであった。それは、「全てのもは他の全てのもとの関連するが、近いものは遠くのものより関連が強い」（Tobler 1970: 236）というものである。これは、ユークリッド空間における距離減衰の関係を法則とみなしたもののだが、むしろ逆に、事物の関連の強さがそれらの間の「近さ」を定義する、といえないだろうか。

他方、実証主義地理学への批判として登場した人文主義地理学者Tuanは、『トポフィリア』に加えて、『空間と場所』、『恐怖の景観』などの著作で、建築学、文学、心理学、哲学、人類学、アートの分野に刺激を与えてきた。Tuanは、場所愛のほかに、日常の景観、ホームの重要性を唱えてきた。すなわち、「地理学は、人類のホームとしての地球の研究である」（Tuan 1993: ix）という。そして彼は、小説や詩、エスノグラフィーを著作中に引用するのである。近年のフェミニスト地理学が「ホームという場所」の概念に注目し（Blunt and Dowling 2006）、また文学批評の分野で「文学地理学」という新しい研究領域が広がり、そこでTuanが重要視されている（Westphal 2011 ; Tally 2019）。このことから、筆者は場所愛ともいえる先のサン=テグジュペリの主人公の言葉が、「地理学第1法則」の有力候補に思われたのである。

日本の地理学界では、杉浦 (1992)、杉浦編 (1995) の文学と地理学をめぐる論考が話題となると同時に、小田 (1997) による批判的考察によって、このテーマが一定の深まりをもったように思われる。小田 (1997) は、杉浦編 (1995) の10編の論文には、統一した理論的な基礎がないことを問題としている。すなわち、資料としての文学作品、文学の中の場所イメージ論、文学の中の空間行動論、作品論・作家論というテーマが混在しているという。筆者はここに、実証主義と人文主義の対立を入れて考えてみたい。言い換えれば、『都市空間のなかの文学』（前田 1982）と、『文学のなかの地理空間』（杉浦 1992）

の違いは何か、という問いでもある。

文学作品を実証主義地理学が扱うと、小説の言語空間から地表の物的空間（その表現としての地形図）への1対1写像mappingを探索しがちである。他方、地理空間に関心の深い文学者（大岡昇平、前田愛、川本三郎ほか）は、「場所」がどのような含意をもつかを、現地の観察、文献の探索を通じて、作品の言語空間の中で理解しようとする。作品に実在の地名が用いられている場合、この文学者たちの分析は杉浦編（1995）の著者たちの分析に近づく。しかし、根本的に交わらない部分がある。それは、異化と想像力、そして可能世界といった人文主義的な概念である。筆者はこの交わらない部分を埋めるため文学理論を参照しつつ、モンゴメリの『赤毛のアン』の言語空間を、19世紀後半のプリンス・エドワード島の「可能世界」の地誌として読んでいくこととする。

II 新たな地誌のための文学理論

1. 異化と想像力

作家の大江健三郎は、自身の小説執筆の経験に基づいて、欧米の文学理論を幅広く参照しつつ、小説の方法を実践的にまとめている（大江 1978, 1988）。その中で印象的なのは、ロシア革命前後に活躍したロシア・フォルマリストの言語学者シクロフスキーの「異化」の概念と、第二次世界大戦中に科学認識論を革新したフランスの科学哲学者バシュラールの「想像力」の概念である。

ロシア・フォルマリズムについて、大江（1978: 27-32）のレビューを参考にしながら、「異化」の概念を明らかにしておきたい。それによると、自分が覚えていない習慣的あるいは無意識的行動は、生活の中に存在していないも同然として、知覚の「自動化作用」と呼ばれる。この自動化作用によって、私たちは知的エネルギーの節約、代数化を図っているというのである。これに対して、芸術の手法としてシクロフスキーが提唱するものが「異化」である。それは「形式を難渋にして知覚のむずかしさと持続時間を増大させる手法」であるという。

この「異化」の概念を、大江があげた包装されたものの事例で確認しておきたい。

ヨーロッパから輸入した古家具が、倉庫に十個おいてある。倉庫に品物がちゃんと届いているかどうか、輸入商社の人間が確かめに来る。かれは伝票の数値にしたがって——つまり代数学によって——、十個の包装されたものがあることを、それと認め知ることができれば、目的を達する。

ところが芸術家は、数量などは二次に——もとより数があるかどうか、それと認め知ることも格別邪魔にはなるまい

が——、倉庫に入りこみ包装を解いて、古家具のいちいちをはっきり眼におさめ、さわってみもするのでなければ、満足しない。自分の目で明視し、ものを感じとることをするまでは、伝票の数値とか、ここに梱包が十個あるじゃないか、というような挨拶では、ものを見たとは感じる事ができぬと、倉庫番にむけていいうるはずである（大江 1988: 22. 強調は原著者による）。

「認め知る」よりも「明視する」ことが文学の力であり、知覚の自動化作用からものを解放することである。

ここで、もう一つの問題である「想像力」の問題に行き着く。バシュラールは、「運動の想像力に関する試論」というサブタイトルをもつ『空と夢』の冒頭を、イメージと想像力を区別することから始めている。

いまでも人々は想像力とはイメージを形成する能力だとしている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけても基本的イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ。イメージの変化、イメージの思いがけない結合がなければ、想像力はなく、想像するという行動はない。もしも眼前にある或るイメージがそこにはないイメージを考えさせなければ、もしもきっかけとなる或るイメージが逃れていく夥しいイメージを、イメージの爆発を決定しなければ、想像力はない（バシュラール1968: 1-2. 強調は原著者による）。

想像力imaginationは、イメージimageとは違い、また空想fantasyでもない。バシュラールの想像力論を筆者なりに言い直すと、イメージは現実世界について知覚した内容を「要約」したものであり、その際に人々の意味体系が情報のフィルターの役割を果たす。これに対して想像力は、知覚による直感的なイメージを「変形」して、現実世界を新しく認識するための、異なった意味体系を提示することであろう。そして空想とは、イメージに依拠せずに別の世界を「構築」し、現実世界では得られない安住の地を求めることであろう。

2. 可能世界の意味論

フランス地誌学派を切り開いたヴィダル＝ド＝ラ＝ブラージュは、地域の「地的統一」という観念を提唱したが、ラツェルや社会学者デュルケームのような法則を求めることは少なく、彼の地理学は「可能論」possibilismと呼ばれた。野澤（1988: 237-238）は、ヴィダルの可能論は実は偶然論であったとして、ローカルな関係による「生活様式」を、偶然性contingenceが部分的に介入した

図式として示した。ここでいう偶然性とは、様相論理学の必然、偶然、可能、不可能という様相modeにおける偶然であって、サイコロの確率という量的な蓋然性probabilityではない。そこで、別論文で筆者も注記したとおり（水野 2017: 86）、contingenceを偶有性と訳しておきたい。偶有性とは、事物の中心的ではない特性、あるいは現にある事物とは「わずかに違う」条件である。そして可能世界とは、分析哲学者のクリプキ（1985: 20）によれば、「世界がありえたかもしれないあり方」の全体、あるいは世界全体の諸状態ないしは諸歴史のことである。しかし、この可能世界は単なる空想ではなく、現実世界から延長して想像されたものであり、偶有性が違うだけの「ありえたかもしれない世界」である。逆に、現実世界は多くの可能世界の中の一つがたまたま実現したともいえる。

ここで検討しておきたいのが、可能世界を記述する上で重要な反事実的条件法counterfactualの論理である。筆者は、ヴィダルの可能論、偶有性、生活様式を論じる際には、この分析哲学における反事実的条件法の検討が必要と考えている。これは実証主義的な傾向の強い地理学ではあまり取り上げられてこなかったが、Gregoryが人文地理学辞典の中で論じていることが興味深い（Gregory 2000: 118-119）。ただしGregoryは、反事実の説明をシミュレーションやモデル構築と結びつけたが、偶有性の役割を考慮しておらず、「そうであったかもしれない」歴史の検討を有益でないとしている。歴史-地理的な事実を、そうでしかありえなかった唯一のものともみなすのは、素朴な経験論に陥っていないだろうか。

Ⅲ 地誌的読解の方法

地誌的読解を行う上で思い出されるのが、スペインの社会思想家オルテガ・イ・ガセットが『ドン・キホーテをめぐる思索』で述べた次の言葉である。「私は、私と私の環境である。そしてもしこの環境を救わないなら、私をも救えない。…（中略）…すなわち現象を救えという意味である。われわれの周囲にあるものの意味をさぐれということだ」（オルテガ 1987: 65）。これを関数のように記述するならば、以下ようになる。

$$\text{私} = f(\text{私}, \text{私の環境}) + \delta \quad (1)$$

ここで δ は、「私」と「私の環境」の関係にとっての外部もしくは偶有性である。形式としては自己言及的な関係である($X = f(X)$)。この関数 f は、私と環境との現象学的な関係、つまり環境が私にとってどのように経験され、価値づけられているかを示す特定の関係性である。

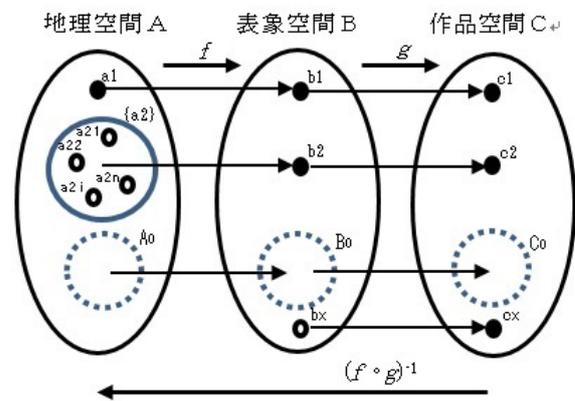


図1 地理空間と小説の対応関係
(筆者作成)

自己言及的な関数では、再帰的な過程の中で関係の作用が安定して「固定点」が発生することがあり（宇敷 1977: 26）、それが地理空間では「場所」となる。

オルテガの命題は、地理学の伝統的な用語では、風土やエクメーネのヴィダルの理解に筆者には思われる。ヴィダルは『人文地理学原理』において、「地域はどんなに小さく区分していても、そこに異質なものが残る」という趣旨のことを述べている²⁾。筆者は、やはり「地誌学」の授業で、この平明に言い換えられたヴィダルの言明を、「地理学第2法則」と秘かに呼んできた。人間から切り離された客観的な環境というものはなく、逆に、環境と無関係に存在する人間もない。環境を理解することは、「ほかならぬ私」を理解することでもあるであろう。この「ほかならぬ私」は、環境との間で何層にも結びついた複雑なものであるが、その固定点を占めるのがホームという場所である。フェミニスト地理学者が明らかにしたように、ホームとは、私と私を取り巻くマルチ・スケールの社会関係が交差する場所である（Blunt and Dowling 2006）。したがってホームは、単に家庭を意味するだけでなく、語りのコンテキストに応じて、わが町hometownであったり、母国homelandであったり、この地球earth-as-homeであったりする。

オルテガの命題を参考に、地誌の対象である地理空間（集合A）、作家の内的経験である表象空間（集合B）、作られた小説の作品空間（集合C）を、写像関係によって図式化すると図1のようなになる。作家は特定の地理空間で「生きられる経験」の具体性を持ち、集合Aから集合Bへの写像 f （表象行為）を行う。ここで作家から見た地理空間の要素に、実在の固有名（地名、人名、局地的な特徴など） a_1 、実在の固有名をモデルとした架空の固有名 a_2 、そして作家にとって「日常的で当たり前の世界」の集合 A_0 （地理空間Aの部分集合）の三つがある。

実在の固有名 a_1 , b_1 , c_1 は、三つの集合間で1対1対

応の写像をたどることができる。実証主義地理学による小説から地理空間への「現地比定」の試みは、写像 f と写像 g の合成写像の逆写像 $(f \circ g)^{-1}$ を行なおうとすることである。しかし実在の固有名 a_2 をモデルとした架空の固有名 b_2 は、モデルとなった場所の部分集合 $\{a_2\} = \{a_{21}, a_{22}, \dots, a_{2i}, \dots, a_{2n}\}$ に「ゆるく」対応づける。それは、実在の地名を架空の地名にしたり、複数の場所の要素を抽出し組み合わせて、その架空の場所の要素にしたり、などである。この変形 $\{a_2\} \rightarrow b_2$ によって、実在の地理空間 A とは「少し」違う表象空間 B が作家の中に作られる。その変換規則は一般に読者に知らされないが、作家の中には実在の地理空間が「異化」されている。

そして作家にとって「日常的で当たり前の世界」の集合 A_0 は、実は地誌においては重要な内容を含む。なぜならば、ある特定の地域の「生きられる経験」が小説の中に組み込まれ、これを理解することはそのまま地誌であるからである。しかし、作家にとって日常的で当たり前の事柄 B_0 は小説中に明示化されず（作家自身も意識に上らないであろう）、しばしば偶発的な事実として読者の前に現れる。この知覚の自動化作用、あるいは無意識化された習慣は、量的には、テキスト中の単語や言い回しの頻度分布から、質的には、「驚き」の場面から知ることができる。後者の分析では、フィクション cx が重要である。フィクション cx は、作品全体に作家の「視点」を導入しているので、これの解釈抜きで作品それ自体の理解は難しい。実在しそうな人物、ありえなさそうな行動などが小説に導入されることにより、実在の地理空間が「少し」違うものに変形される。そのことによって実在の固有名さえ、従来のイメージが「異化」されるであろう。

作品空間 C は表象空間 B を通じて、地理空間 A の「可能世界」の一つとして読者の前に現れる。そうすると、小説を地誌として読むとは、読者が可能世界に「住む」ことによって、それを可能にした地理空間を推測することになるであろう。

IV 『赤毛のアン』の地誌

1. 訳書タイトルと日本的流行

本稿で取り上げる小説『赤毛のアン』は、原著が *Anne of Green Gables* (グリーン・ゲイブルズのアン) として、カナダのルーシー・モード・モンゴメリ (1874-1942) によって、1908年に出版された (Montgomery 1908)。筆者は、この小説が「少女小説」で、文部省が推薦する道德教材との先入観をもっていただけのため、長らく読むことを避けてきた。ところが、2018年秋、NHKの人気番組「100分de名著」に、脳科学者の茂木健一郎氏が講師になって、

この小説を取り上げて、その魅力的な解説に筆者も引き込まれた。筆者は『赤毛のアン』を初めて読みながら、プリンス・エドワード島が次第に親密に感じられてきた。その意味では、この作品は、筆者の考える「地理学第1法則」を満たしていた。したがって、『赤毛のアン』は地誌書であると筆者は考えている。

『赤毛のアン』は「アン産業」とも言われる出版環境が日本国内に豊かに備わっていて、日本的流行を示している。たとえば *Anne of Green Gables* の翻訳は、村岡訳をはじめとして、少なくとも10種類を越え、「アン」シリーズの総発行部数が日本だけで1000万部を越え、英語圏全体の300万部を凌駕しているという (久米 2015)。またプリンス・エドワード島への日本人観光客は1990年代の最盛期に、年間2万人ほどであった。『赤毛のアン』に対する日本人女性の (1990年代以降は男性にも) 熱烈な人気は、村岡花子の訳文の日本語の魅力のほかに、孤児院から手違いで引き取られた赤毛の少女の成長と自然観察の物語が、日本の戦後の窮乏生活と女子教育に当てはまり、広く読まれたからだという (久米 2015)。

この小説について、学術的な研究の蓄積も多く、ここで一つ一つ紹介する余裕はないが、英語圏文学のほかに、児童文学、ジェンダー研究、キリスト教文学、観光学などの研究の広がりが見られる。地理学でもこの作品を、こどもの知覚環境、特に認知地図と遊び空間を作品から分析している (寺本・井藤 1995)。しかし寺本・井藤 (1995) を除けば、『赤毛のアン』を人間学として読み解くものが大半であり、この小説の原著タイトルの意味が、十分に解明されていない。本稿はグリーン・ゲイブルズを地名ととらえ、プリンス・エドワード島の風土と地域社会にもっと注目したい。モンゴメリによる本書の続編の直訳タイトルは、『アヴォンリーのアン』、『(プリンス・エドワード) 島のアン』、『柳風荘のアン』のように、アンと場所をめぐる物語であったからである (ちなみに、これに対応する訳書は、『アンの青春』、『アンの愛情』、『アンの幸福』と続き、アンと人生に焦点があたっている)。そもそも生が生じるとは、どこかの場所を取る (Seamon 2018: *Life takes place*) であり、その際に固有名 (地名) が重要な役割を果たす。

2. 固有名の中の三つの類型

グリーン・ゲイブルズとは、一般に緑の切妻屋根の家を指す。切妻は二つの屋根を合わせた単純なもので、積雪地帯、あるいは入植地で多く用いられる民家形式である。しかし、原著では大文字で表記されていることから、この作品中では固有名であることがわかる。村岡訳 (以

下、同様)では、次のように記述される。

マッシュウ・クスパートは『^{グリーン・ゲイブルズ}緑の切妻屋根』の向こうの、広い赤土の畑の蕪はまいてしまったらしかった (モンゴメリ 2008: 7)。

ここで言うグリーン・ゲイブルズは、クスパート兄妹の家を屋号で呼ぶ、メトニミー(換喩)である。松本侑子は新訳を著し、プリンス・エドワード島には同姓同名が多いので、区別するために屋号を使っていると注記している (モンゴメリ 2000: 451)。したがって、グリーン・ゲイブルズは家の周囲に広がる農場であるともいえる。ほとんど自給自足だった19世紀後半のグリーン・ゲイブルズは、パン、野菜、肉、チーズ、バター、果物、ジャム、お菓子、燃料、服などを家と農場でまかなう生活空間であった。

アヴォンリー村の世話好きで勤勉な隣人、リンド夫人は、グリーン・ゲイブルズを次のように見ている。

道のりはたいしたことはなく、果樹園にかこまれた、だだっぴろいクスパート家はリンド家の窪地から街道づたいに行けば、半マイルのまた半分ぐらいの道のりだったが、長い小径があるのでかなり退屈だった。息子におとらず内気で無口なマッシュウの父は、できるだけ人から遠のいた森の中へでもひっこみたいところを、その一步手前の地所に屋敷をさだめた。その開墾地のはずれに『^{グリーン・ゲイブルズ}緑の切妻屋根』の家は建てられて今日におよんでいるので、アヴォンリーの家々が仲よくたちならんでいる街道からはほとんど見えなかった。リンド夫人からみると、そんな奥まったところにいたのでは、住むという意味をなさないのだった (モンゴメリ 2008: 9)。

リンド夫人は、クスパート兄妹がアヴォンリーの家々が立ち並ぶ街道からはずれて500mほど奥まった土地に、両親の時代から、住んでいる (live) というよりも滞在している (stay) だけだと評している。小さな地域社会でクスパート兄妹の内気で目立たない様子が、地理的位置によって示されている。もう一つの隣家パーリー家は屋号が『^{オーチャード・スロープ}果樹園の坂』であり、アンはこの家の同い年のダイアナと「腹心の友」の誓いを立てる。結局、グリーン・ゲイブルズから二つの隣家まで大人の足で7、8分はかかりそうな、閑散とした入植地の集落といえる。

固有名は全ての可能世界を一貫してつなぎとめる固定指示詞rigid designatorである (クリプキ 1985)。しかし、作品世界の中では固定の度合いについて区別が必要である。すなわち、①実在の固有名、②実在のモデルの

表1 作品中に登場する固有名の分類

実在の固有名	実在のモデルのある固有名	架空の固有名
プリンス・エドワード島 ノヴァスコシア シャーロットタウン セント・ローレンス湾 ニューブラウンズウィック オタワ スコットランド ロンドン オーストラリア フランス人	アヴォンリー (キャベンディッシュ) カーモディ (スタンリー) ホープタウン、レドモンド大学 (ハリファックス) ブライトリバー (ハンターリバー) ホワイトサンズ (ラティスコ) クィーンズ学院 (シャーロットタウン)	ニューブリッジ スペンサーヴェル ボーリングブローク メアリズビル
【地域的個性を示す一般名詞】 赤い道、赤土の畑、赤い丘、赤い崖、馬車、じゃがいも、白樺、銀世界、小川、窪地、砂丘、ロブスター缶詰工場、孤児院、避暑地、日曜学校、討論会、ティー・パーティー、木いちご水、アイスクリーム	【一般名の固有名化】 (リンド家の) 窪地、(クスパート家の) 緑の切妻屋根、(パーリー家の) 果樹園の坂、(パーリーの) 池、並木道、(ジェリー・ブートの) 入江、(長老派の) 教会、(カーモディの) 医者、(ブライトリバー) 駅、(ホワイトサンズの) 海岸通り	【アンによる名づけ】 輝く湖水 歓喜の白路 アイドルワイルド ドライアドの泉 ウィローミア 恋人の小径 すみれの谷 樺の道 ヴィクトリア島 お化けの森

(松本注 (モンゴメリ 2000)、菱田 (2014) を参考に、筆者作成)

ある固有名、③架空の固有名、である (表1)。グリーン・ゲイブルズはアヴォンリー村にあり、それは実在のキャベンディッシュがモデルである。言うまでもなく、モデルは実在とは違う。すなわち、作品中のアヴォンリー村は現実のプリンス・エドワード島の村の一つ、またはいくつかを混合した、ありふれた架空の村と考えた方がよい。

島 the Island と現地の人々がいうとき、プリンス・エドワード島であるだけでなく、島嶼性の地域アイデンティティも示している。たとえば、北米大陸のノヴァスコシア Nova Scotia 州は新しいスコットランドを意味し、そのスコットランド系の孤児院から島にアンはやってきて、逆に後ではそのレドモンド大学に進学した。シャーロットタウンは、プリンス・エドワード島の州都であり、バプテスト教会、クィーンズ学院、避暑地のホワイトサンズ (合衆国からの旅行者が多い) を支える病院などがある。オタワはできたばかりのカナダ連邦の首都であるが、リンド夫人はプリンス・エドワード島と連邦の違いを意識するとき、オタワの名前を出す。またアヴォンリーの人たちがイギリス系以外の人々を引合いに出すときは、ほぼ批判的な内容となる。たとえば、オーチャード・スロープとの交流の少なさ (アイルランド系)、農場へのジェリー・ブートの雇用 (フランス系)、ロンドンのストリート・チルドレンへの言及 (アラブ系) などである。もともと一般名であったものが、島の中で固有名とし

て使われるものもある。たとえば、窪地Hollowといえはリンド夫人の家の付近を、入江Creekといえはジェリー・ブートの家の付近を、教会といえはカーモディにある長老派の教会を、駅といえはブライトリバー駅をそれぞれ指す。これらの地名は、アヴォンリーから歩いて行ける程度の日常生活空間である。またティーパーティはイギリス文化を、日曜学校はキリスト教を、討論会は入植地をそれぞれ含意する。

3. 地形誌と偶有性

この小説の第1章の最初の二つのパラグラフは、地形の記述が具体的で、擬人的である。

アヴォンリー街道をだらだと下って行くと小さな窪地に出る。レイチェル・リンド夫人はここに住んでいた。まわりには、榛の木が茂り、釣浮草の花が咲き競い、ずっと奥のほうのクスバート家の森から流れてくる小川がよこぎっていた。森の奥の上流のほうには思いがけない淵や、滝などがあって、かなりの急流だそうだが、リンド家の窪地に出るころには、流れの静かな小川となっていた。それというのも、レイチェル・リンド夫人の門口を通るときには、川の流れてさえも行儀作法に気をつけないわけにはいかないからである。リンド夫人が窓ぎわにすわり、小川からこどもにいたるまで通行のもの全部にするどい監督の目を光らせていて、ちょっとでも腑におちない点やふつごうなところを見つけたが最後、その理由を根ほり葉ほり、さぐりださずにはおかないということを、川の流れのほうでもわきまえていたのかもしれない (モンゴメリ 2008: 5)。

主人公アンの風貌や人柄、人生を早く知りたい読者ならば、この冒頭の記述は、偶有的な事実が長々と述べられているように見える。

しかし、英文学の石木 (2016) の興味深い分析によれば、このパラグラフはアヴォンリー社会における実力者としてのリンド夫人を、地形の用語で細かく語っているという。そして、第2パラグラフで、リンド夫人の主婦としての腕前、裁縫の集いの中心、日曜学校の経営、外国伝道夫人後援会の重鎮でありながら、台所の窓下を見ながら何時間でも外に鋭い視線を向けていることを、道路で説明しているという。

(中略) それもその間じゅう、この窪地からずっと向こうの赤い丘の急な斜面までうねうねと続いている街道のほうへ、たえず目をくばりながらの仕事だから驚きいったものである。アヴォンリーはセント・ローレンス湾につきでた三角形

の小さな半島を占めており、両側に水をひかえているので、ここからは出ていく者も入ってくる者もかならずこの丘の道をこえなくてはならないので、しよせん、リンド夫人のぬけめのない監視をのがれることはできなかった (モンゴメリ 2008: 6)。

結局、小説の冒頭で、重要人物であるリンド夫人のアヴォンリー社会における位置づけを、小川と道路の擬人法で語っているのである。アヴォンリーの人々の「生きられる空間」が示され、風景がただの外部環境ではなくなる。この冒頭部分はプリンス・エドワード島の地形が「異化」され、読者の知覚を長引かせる、生きいきとした地形誌となっている。

アヴォンリー街道は架空の道であるので、この道の様子はプリンス・エドワード島の中でありふれた道の一つといえる。この島は、氷河によって削られた土地がゆるやかに波打った平原となっている。この小説の冒頭には、「だらだと下って行く」とか「榛の木」(温帯低湿地に多い落葉樹で、木炭や油に使用) とか「小川」などの用語が使われている。北米の地形用語では、小川brookは水源から流れてくる小さな水流で、それらが集まって細長い入江の川creekとなり、それらが複数流れ込んで航行可能な河riverとなる。この小説の後半にある第31章が「小川と河が会おうところ」となっている。これは氷河地形の小川—川—河のシステムが、屋号—村—州の生活空間に対応づけられている。

アンは、馬車の中でのマッシュウとの会話で、グリーン・ゲイブルズには小川があるか、いきなり聞いている。

グリーン・ゲイブルズ
「緑の切妻」のお家の近くには、どこか小川があつて？
(モンゴメリ 2008: 32)。

アンは孤児院の小さな囲いの中の、小さな木、小さな苔や花、小鳥にとても心ひかれると言っている。小川は、氷河地形のプリンス・エドワード島には多く見られ、実際にこの小説の中でも、小川のほか、丘、原、湖水、窪地、斜面などの特徴的な地形用語が多く登場する(表2)。これはプリンス・エドワード島の地形誌の構成要素である。アヴォンリーの人々が「バーリーの池」(池は人工的なもの) と呼ぶ水面を、アンはイギリスの湖水地方を思わせる言い方で呼びなおす。

ところで、プリンス・エドワード島の歴史地理学の専門書であるClark (1959) の表紙は、プリンス・エドワード島の地図を3枚、歴史的変遷のように描き、その背景で赤色砂岩を思わせる色で塗っている。また邦訳書があ

る歴史家ポールドウィン(1995)の歴史書の原題は、*Land of the red soil*である(訳書の題名は『「赤毛のアン」の島』)。なぜプリンス・エドワード島の歴史と地理を記述した専門書が、赤色砂岩を象徴的に扱っているのだろうか。この小説における「赤」の使用頻度を、デジタル・テキストの検索によって集計すると表3のようになった。アンの赤毛は圧倒的に頻度が高いものの、赤土が意外に多いことがわかる。それは、やはりアンが馬車の中から、初めてプリンス・エドワード島の土地を見たとき、何度もマシュウに尋ねている場面で確かめられる。

…だけど、この赤い道とてもおもしろいわ。シャーロットタウンで汽車に乗ってから、赤い道路をわきに見てどんどん通りすぎて行くので、どうしてあんなに赤いのってスペンサーの小母さんにきいたのよ。そうしたら小母さんにもわからないですって。そして、後生だからこれ以上なにもきかないでちょうだい。もう千くらいもきいたじゃないのって言いなすったわ。そのくらいはきいたかもしれないって、あたしも思うの。でもわからないことをきかなかつたら、どうしていろいろなことがわかるかしら。ねえ、どうして道が赤くなるの？(モンゴメリ 2008: 29)。

世界の赤色土壌の分布といえ、まず熱帯の貧栄養の酸性土であるラテライトか、地中海沿岸の石灰岩の風化土であるテラロッサであろう。それが稚内とほぼ同じ緯度にあるプリンス・エドワード島に卓越して見られ、しかもそれなりの肥沃土壌であるのは、近隣の北米大陸と比べても珍しい(高校地理の副教材である「高等地図帳」では、描かれていない)。アンにとって、この島の第一印象は、赤土であったのである³⁾。マリラがアンをスペンサー夫人のもとに戻そうと馬車で海岸通りを通ったとき、そこにも赤い崖が印象的に出てくる。

4. 「驚き」と日常世界

偶有性が「驚き」として現れるとき、「日常的で当たり前の世界」を照らし出す。地誌がその土地の日常世界を記述するものと考え、この「驚き」の分析は重要である。それは、無意識や習慣によって知覚が自動化してしまっていた世界を、一気に明るみに出す(図1の集合C₀)。この小説の最初の三つの章のタイトルは、「○○は驚いた」となっていて、リンド夫人、マシュウ、マリラの順番になっている(アンが驚いたのではない)。

小説の第1章では、19世紀後半のプリンス・エドワード島の、変化に乏しいアヴォンリー社会で、目立たずに暮らしていたグリーン・ゲイブルズから、マシュウが白

表2 地形用語の頻度

brook	41
hill	40
field	38
Lake of Shining Water	24
Barry's pond	23
hollow	21
slope*	14
river	9
creek	3
cliff	3

(*: Orchard Slopeを除く。下記のデジタル・テキストより筆者が検索し集計。http://www.gutenberg.org/files/45/45-h/45-h.htm)

表3 「赤」の使用頻度

赤毛	49
赤土(道, 農地, 岩を含む)	12
夕陽, 紅葉	5
赤い瞳	4
赤い飲み物	3
その他	23
計	96

(デジタル・テキストは表2と同様。筆者集計)

いカラーをつけて栗毛の馬車に乗って町に出かけたことをリンド夫人が見て、隣人マリラに真相を確かめに向かうという場面である。そこで、「リンド夫人が驚いた」のは、初老の段階に入ったマシュウとマリラの兄妹が、農場を運営していく上で不安を抱えており、ノヴァスコシア半島の孤児院から少年を養子にしたいと考え、実行に移したこと(偶有性)を知ったからである。ここで筆者が地誌として重要と考える記述は、リンド夫人とマリラが、どのような孤児を迎え入れるかをあれこれ議論した箇所である。リンド夫人が心配したのは、マシュウもマリラも結婚せず、子育ての経験がないのに、少年の孤児を養子にしたいと考えたからである。そして、もしそうするならば、島のフランス系の少年ではなく(仕事に慣れると、すぐにロブスターの缶詰工場か合衆国に行ってしまうから)、またロンドンのストリート・チルドレンではなく、やはりスコットランド系住民が多いノヴァスコシア州の孤児院から迎えた方がまだましと話し合うのである。18世紀半ばにイギリス軍がプリンス・エドワード島のフランス系住民を追い出し、その結果スコットランド系住民が多くを占めることになったが、イギリス帝国の自治領からカナダ連邦に移行する時期、何をこの島のアイデンティティと考えていたかが、うかがえる。

第2章では、ブライトリバー駅で待ち合わせた孤児が、何かの手違いで少女であり、しかしすぐに帰らせるのはまずいと思ったマシュウが、馬車に少女を乗せてグリーン・ゲイブルズに戻る。その途中、この少女の文学的想像力を含む夢の話しかけに、愉快になってしまう。こ

の少女(第3章で初めて、アンと名乗る)の存在に、マッシュウが驚いたのではない。内気で無口なマッシュウはもともとアヴォンリーの女性たちが苦手で、話ができる女性といえ、妹のマリラと隣人のリンド夫人だけだった。しかし、初めて会ったこの英文学の教養の高い少女(偶有性)に心開き、そんな新しい自分を知って思わず「マッシュウは驚いた」。スコットランド系移民として初めてこの土地にやってきたマッシュウとマリラの両親は、目立たない生活を送り、その影響を若いころから受けてきたマッシュウが、久しぶりに自由に考え、振る舞う人物になったのである。入植地で結婚をせず、ひっそり暮らしていたマッシュウは、アヴォンリー社会の標準的な世帯とは違う周辺の生き方をしていて、そのことがノヴァスコシアからの孤児を受け入れる素地となる。

そして第3章では、この少女アンを一晩だけグリーン・ゲイブルズに泊めるが、アンをスペンサー夫人に引き取ってもらおうかどうか、兄妹で話し合う。

問いつめられて困ってしまったマッシュウは口ごもった。「わしは思うに――わしらには、あの子を、置いとけまいな」「置いとけませんね。あの子がわたしらに、何の役にたつというんです?」「わしらのほうであの子の役に立つかもしれないよ」突然マッシュウは思いがけないことを言い出した(モンゴメリ 2008: 55)。

実用からではなく、まず贈与の姿勢を示したマッシュウに、「マリラは驚いた」。このマッシュウの発言は、小説中のほかの登場人物(トマスの小母さん、ハモンドの小母さん、リンド夫人、初期のマリラ、ブリュエット夫人)が労働力として孤児を一般的に見ているのに対して、アンという特定の孤児をそれ自体として受け入れている。その証拠に、当初の目的であった農場の労働力としては、フランス系の少年ジェリー・ブートをすぐに雇用するのである(第4章)。筆者には、このマッシュウの姿勢とそれに驚いて自分も変わっていくマリラが、アヴォンリー社会を(プリンス・エドワード島を)「異化」しているように思われる。現実には、きわめて確率の低い発言(偶有性)ではなかったかと思われる。しかし、マッシュウたちをこのように導いたコンテキストとして、はっきりと示されているわけではないが、ノヴァスコシアおよびプリンス・エドワード島の長老派教会の存在は無視できない。

5. ホームという場所

最後に、村岡訳で注目された赤毛について、考察したい。モンゴメリの原著タイトルが『グリーン・ゲイブル

ズのアン』であったものを、戦後日本社会に向けて『赤毛のアン』と訳して出版したことは、この小説の日本における流行の重要な要素であった。しかし、あらためて、赤毛に注目して筆者がこの小説を読むと、アンと赤毛に関心をもったのは、アン自身を除けば、リンド夫人とギルバートしかいないことに気づく。アンと赤毛は、本稿の図1で示せば、作家が小説空間の中に新規に導入したフィクションcxであろう。キリスト教世界における赤毛の歴史的・文化的な意味は、まずアウトサイダーであるという(高橋 1996)。そうすると、アンという小説中の存在は、プリンス・エドワード島に生まれ育ったモンゴメリが、女性にとって窮屈に感じた現実とは少し違ったかたちで仮に島社会を生きるためのフィクション、つまり著者の「視点」であったことがわかる。

女性と話すのが苦手なマッシュウと豊かな文学的想像力で話しかけるアン、そして華美や虚栄を嫌うマリラと質素で地味なhomeyアンは、最初から引き合うものをもっていた。しかし、なぜ二人の小母さんと孤児院に育てられたアンが、英文学に通じることができたのか。それは、人間学的には、頼るものがない赤毛コンプレックスのアン、自己防衛の本能によるといえるかもしれない。しかし筆者は、スコットランド系移民中心のノヴァスコシアが、母国イギリスの文化を再生産する傾向が強かった結果ではないかと、思うのである。

そして小説の最後で、主人公アンはこう明言することになる。

「グリーン・ゲイブルズを売ってはいけないわ」(モンゴメリ 2008: 514)。

これは文字通りには、マッシュウが亡くなった後に、アンがマリラに対して、グリーン・ゲイブルズの地所を売るなど言っているわけであるが、それだけではない。それは、アンが11歳でこの風土に調和した家にやってきて、そして大学進学のために一時、この家を離れている16歳までの、グリーン・ゲイブルズを中心としたアヴォンリー村、プリンス・エドワード島での「生きられる経験」の全体に関わる。英文学やジェンダーの既存研究では、アンがこのときグリーン・ゲイブルズの家長として相続を希望したという論調が散見されるが、それは筆者には、やはりアンの人間的な理解に偏っていると思われる。

アンの上記の発言は、アンがグリーン・ゲイブルズで暮らすうちに積み重ねてきたホームの観念から発せられている。ノヴァスコシアの孤児院にいたとき、早く亡くなった両親の教師という記憶がアンとアンと、彼

女はイギリス詩という空想の中に「住んで」いた。というのは、11歳のアンがマリラに最初に会ったときに、コーデリアと呼んでほしいと言ひ、それが無理だとわかると、「eのつづりの付いたアンAnne」と呼んでほしいと言ひ直せたのは、高校教師という尊敬される職業にあった両親の存在が影響していると思われるからである。アンのイギリス詩の暗唱と、マシユとマリラの静かな宗教性が出会って、アンはグリーン・ゲイブルズでの5年間を過ごし、その経験と記憶、人間および風土との関係の固定点、すなわちホームとしてグリーン・ゲイブルズが作られていった。したがって、グリーン・ゲイブルズを失うことは彼女の生の経験全体の固定点を失うことであり、記憶の手がかり、社会関係の束を失うことである。そのことに比べると、家の相続をめぐる問題は、派生的な世事にすぎないように思われる。

V おわりに

本稿では、モンゴメリの小説『赤毛のアン』を地誌として読んでみた。そして、小説を地誌として読むとは、ヴィダルの可能論的な地誌を実践することでもあり、その方法論を文学理論から援用して紹介した。その結果、『赤毛のアン』は邦訳タイトルから受ける印象とは異なり、アンを赤土や小川などプリンス・エドワード島と結びつけたほうが小説を理解しやすく、また主人公のホームの観念をよく理解できるのではないかと考える。

最後に、小説を地誌として読むことの意義を再確認するために、プリンス・エドワード島の実証的な地誌を引用しておきたい。それは、たとえば以下のような北米地誌の標準的なテキストに見られる。

カナダ（ジャック・カルティエが「神がカインに与えた土地」との思いにふけた）東部が厳しい自然環境にあるという一般化は、特にプリンス・エドワード島には当てはまらない。先のフランス人がこの小さな島をサン・ジャン島と名付けたように（約2千平方マイルの大きさで、だいたいデラウェア州の大きさに等しい）、ゆるやかに傾斜した赤色砂岩層からなる、弓の形をした平原であり、ノヴァスコシアとの間を分けるノーザンバーランド海峡の水面からわずか百フィート高いだけである。氷河は、砂岩からもたらされた土壌物質の深い地層を作った。赤味を帯びたプリンス・エドワード島の土壌は、特に肥沃というわけではないが、カナダ東部のほかのどの場所の土壌よりも農業に適していた。この島で、海から7マイル以上離れた地点はない。冷涼で海洋性の気候は相対的に穏やかで、3、4カ月の耕作期間がある。じゃがいも、穀類、牧草がこの環境によく合う（Hudson 2002: 37,

強調は筆者による）。

この地誌は、非常にわかりやすく簡潔なプリンス・エドワード島の地誌となっている。これは『赤毛のアン』とは異なる実証主義的な記述である。ただし、筆者が強調した箇所、「ゆるやかに傾斜した赤色砂岩層」は、原文ではgently dipping, red sandstonesとなっている。直前の文章のキリスト教的な修辭からすると、「やさしく浸礼を受ける赤色砂岩層」とも読めて、しばらく知覚が長引かせられる。すなわち、セント・ローレンス湾からのやわらかな波が、氷河で削られた平原の島を洗う様子が、キリスト教の浸礼の儀式に重ね合わせられる。実証主義的な文章にもこのような文学的な表現が潜んでいることがあり、それが地誌の記述を魅力的にすることがある。本稿で試みたのは、それを事例で示すことであった。

注

- 1) これは分析哲学の用語であり、後述するが、日常用語では「そうであったかもしれない世界」くらいの意味である。
- 2) 中村和郎先生（駒沢大学名誉教授）は、かつて「空間の理論研究会」（GRECO会）でそのように話されたのを、印象深く筆者は覚えている。後で飯塚浩二訳書を確認したところ、以下の箇所であった。「居住人口に加入している諸要素を、人類学上最も恒久的だと評せられている諸特徴にもとづいて区別してみようとする、大きな国の場合だけでなく小さな面積しかもたない地方的な区域における場合でも、ほとんど例外なしに同質性の欠如が原則的であることがわかる」（ブラーシュ 1970: 54）。この硬い内容が、中村先生のその場の引用によって、暗唱できる明快な文になったのであろう。
- 3) 邦訳タイトルが『赤土とアン』でもよかったのではないかと筆者は夢想する（『緑の切妻屋根のアン』ほど情緒が感じられず、『赤毛のアン』ほど少女読者をひきつけないが）。歴史家ボードウィン（1995）が原著タイトルで使ったように、赤土はプリンス・エドワード島そのものだからである。

文献

- 石木利明 2016. 原文のカーAnne of Green Gables (『赤毛のアン』) 冒頭に学ぶ. *Otsuma Review* 49: 45-56.
- 宇敷重広 1977. 初等カタストロフ理論. トム, R.・ジーマン, E. C.・宇敷重広・佐和隆光『形態と構造—カタストロフの理論』1-49. みすず書房.
- 大江健三郎 1978. 『小説の方法』岩波書店.
- 大江健三郎 1988. 『新しい文学のために』岩波書店.
- 小田匡保 1997. 文学地理学のゆくえ—杉浦芳夫編『文学 人 地域』はなぜ面白くないか. 駒沢地理 33: 101-116.

- オルテガ・イ・ガセット, J. 著, 佐々木孝訳 1987. 『ドン・キホーテをめぐる思索』 未來社. Ortega y Gasset, J. 1914. *Meditaciones del Quijote*. <http://www.gutenberg.org/files/57448/57448-h/57448-h.html> (最終閲覧日:2020年2月29日).
- 久米依子 2015. 『赤毛のアン』をめぐる言説配置—90年代フェミニズム批評とバックラッシュ. 国文目白 54: 42-52.
- クリプキ, S. A. 著, 八木沢啓・野家敬一共訳 1985. 『名指しと必然性』 産業図書. Kripke, S. A. 1972. *Naming and necessity*. Dordrecht: Reidel Publishing Co..
- サン=テグジュペリ, A. 著, 堀口大學訳 1955. 『人間の土地』 新潮社. Saint-Exupéry, A., de. 1939. *Terre des hommes*. https://ebooks-bnr.com/ebooks/pdf4/saint_exupery_terre_des_hommes.pdf (最終閲覧日:2020年2月29日)
- 杉浦芳夫 1992. 『文学のなかの地理空間—東京とその近傍』 古今書院.
- 杉浦芳夫編 1995. 『文学・人・地域—越境する地理学』 古今書院.
- 高橋裕子 1996. 『世紀末の赤毛連盟—象徴としての髪』 岩波書店.
- 寺本 潔・井藤かおり 1995. 児童文学に描かれた架空空間と子どもの探検行動—『赤毛のアン』及び『ムーミン』を事例に. 杉浦芳夫編 1995. 『文学・人・地域—越境する地理学』261-312. 古今書院.
- 野澤秀樹 1988. 『ヴィダール=ド=ラ=ブラーシュ研究』 地人書房.
- バシュラール, G. 著, 宇佐美英治訳 1968. 『空と夢—運動の想像力にかんする試論』 法政大学出版局. Bachelard, G. 1943. *L'air et les songes*. Paris: Le Livre de Poche.
- 菱田信彦 2014. 『快読「赤毛のアン」』 彩流社.
- ブラーシュ, ヴィダール・ド・ラ, P. 著, 飯塚浩二訳 1970. 『人文地理学原理 上巻』 岩波書店. Vidal de La Blache, P. 1921. *Principes de géographie humaine*. Paris: Armand Colin.
- ボールドウィン, D. 著, 木村和男訳 1995. 『「赤毛のアン」の島—プリンスエドワード島の歴史』 河出書房新社. Baldwin, D. 1990. *Land of the red soil: A popular history of Prince Edward Island*. Charlottetown: Ragweed Press.
- 前田 愛 1982. 『都市空間のなかの文学』 筑摩書房.
- 水野 勲 2017. 地理的カタストロフとしての原発の過酷事故—エクメーネの再概念化. 理論地理学ノート 19: 71-89.
- モンゴメリ, L. M. 著, 村岡花子訳 2008. 『赤毛のアン』 新潮社. Montgomery, L. M. 1908. *Anne of Green Gables*. Boston: L. C. Page & Co. (村岡花子訳1952を, 村岡美枝が補訳)
- モンゴメリ, L. M. 著, 松本侑子訳 2000. 『赤毛のアン』 集英社. Montgomery, L. M. 1908. *Anne of Green Gables*. Boston: L. C. Page & Co.
- Blunt, A. and Dowling, R. 2006. *Home*. London: Routledge.
- Clark, A.H. 1959. *Three centuries and the island*. Toronto: University of Toronto Press.
- Gregory, D. 1994. *Geographical imaginations*. Oxford: Blackwell.
- Gregory, D. 2000. Counterfactual explanation. In *The dictionary of human geography* 4th ed, eds. R. J. Johnston, Gregory, D., Pratt, G. and Watts, M., 118-119. Oxford: Blackwell.
- Hudson, J. C. 2002. *Across this land: A regional geography of the United States and Canada*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Montgomery, L. M. 1908. *Anne of Green Gables*. <http://www.gutenberg.org/files/45/45-h/45-h.htm> (最終閲覧日:2020年2月29日)
- Seamon, D. 2018. *Life takes place: Phenomenology, lifeworlds, and place making*. London: Routledge.
- Tally Jr., R. T. 2019. *Topophrenia: Place, narrative, and the spatial imagination*. Bloomington: Indiana University Press.
- Tobler, W. 1970. A computer movie simulating urban growth in the Detroit region. *Economic Geography* 46: 234-240.
- Tuan, Y. F. 1974. *Topophilia*. Englewood Cliffs: Prentice Hall. トゥアン, Y. F. 著, 小野有五・阿部 一共訳 2008. 『トポフィリア—人間と環境』 筑摩書房.
- Tuan, Y. F. 1993. Foreward. In *Geography and the human geography*, ed. A. Buttimer, ix-xi. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Westphal, B., tr. By Tally Jr., R. T. 2011. *Geocriticism: Real and fictional spaces*. New York: Palgrave Macmillan.

みずの・いさお

基幹研究院・人間科学系

“Possible Worlds” of Prince Edward Island: Anne of Green Gables as a Chorology

MIZUNO Isao (Ochanomizu University)